

名碑 「向岡記」

日本石造文化学会 塩原 都

金蘭書道会 飯村 博

まえがき

水戸藩駒込邸の殿舎前の築山に水戸藩主第九代徳川斉昭が建立した「向岡記」碑は幾多の変遷を経て、東京大学浅野地区の工学部十号館と窒素貯蔵タンクの間のごみの捨て場の中に崩壊寸前の姿で立っていた。碑の後方十メートルには萬年堀ひとつで言問通り、碑面は排ガスによって黒ずみ、酸性雨で風化がすすみ、碑文の判読は困難を極めた。幸い拓本^(参四)などの史料・参考文献により判読できた。

東京大学一三〇周年記念「知のプロムナード」の学内整備事業に伴い平成二十年八月八日、保存修理を施して浅野南門内のスロープの情報基盤センター側壁面に保存することができた。

駒込邸は明治時代以降、陸軍省用地、警視庁用地、東京府用地、さらには東京大学用地を経て浅野家にわたり、再び東京大学の用地になった。大学用地になってからは、研究棟の増設などにより嘗ての駒込邸の庭園は、すべて破壊され江戸時代の面影は全く失われて

しまった。「向岡記」の碑は、斉昭の自撰自書になる碑で、水戸藩駒込邸跡に残された、唯一の遺品である。

碑は当初殿舎前の築山に建立されたと思うが、碑石は石灰岩質で全く加工を加えない野面のままに作られた。したがって、碑面には多くの欠点がある。斉昭はこの欠点を碑文の中に巧みに取り込み、名碑「向岡記」を作り上げた。このような碑は他に例を見ない貴重なものである。斉昭とてこのような作法で作った碑はこれのみである。

さらに、この碑には、白い石、茶色の石、黒い石が添景石^(参三、参十四)として碑の根元に添えられている。

この碑について詳しく調べると、斉昭のなみなみならぬこだわりがわかる。

第一章 「向岡記」の碑と碑文

一・石材（高1.5m・幅約1m・厚11cm前後・白色）



「向岡記」碑（移転前）と添景石

水戸藩駒込邸は、加賀藩邸すなわち現在の本郷地区の北側に位置し、弥生地区と浅野地区並びに隣接する住宅地の範囲を占めていた。この駒込邸跡は、明治以降、使用実態が何度となく変わり、江戸時代の雰囲気はすべて失われてしまったが、徳川斉昭が駒込邸に建立した「向岡記」碑のみが唯一、東京大学浅野地区に残された。

この碑は、工学部十号館と窒素ガス貯蔵タンクの間のごみ捨て場のような場所に、真南から二十度ほど東を向いて立っていた。碑の下部は基礎のコンクリートに塗り込められ、碑文の下端は、各行一〜二字ずつ、そのコンクリートに埋もれていた。碑の後方にはコンクリートの柱をつけて補強してあったが、実際には柱と碑石の間に隙間があつて、補強の役を果たしていなかった。

碑の存在は忘れられ、風化の一途をたどり、崩壊を待つのみ状態にあった。

碑石の小口を観察すると、厚さ十ミリメートル内外の板状の石灰岩層が、薄い絹雲母片岩を挟んだ産状になっている。碑石のこの形状は、常陸太田市の真弓山に産出する寒水石^{※八}の特徴に合致する。

その常陸太田は、慶長十四年（一六〇九）から水戸藩領^{※十二}であった。また真弓山産の寒水石は、水戸藩主第九代斉昭の時代から盛んに使用されるようになった、と史料^{※十三}に記されている。水戸偕楽園の吐玉泉・八卦堂の「弘道館記」碑などがその例である。

以上総合すれば「向岡記」碑も真弓山産の寒水石であると同定できる。

ところで、「向岡記」の碑石は、他に例を見ない、極めて珍しい

使い方がなされている。すなわち、これは野面のままの石が使用されているのである。

碑の原石は、何らかの原因で母岩を離れ、転石となって土石流とともに押し流され、その流れの過程で磨滅し、あのような形になったのであろう。

転石を碑石や庭石とする場合、一般に、これを「自然石」とよび、自然の形が珍重される。この石碑も寒水石の転石を用いたのであるが、石を構成する絹雲母片岩層は、風化の進行に伴い剥離層となる。この碑の拓本をみると、白くくつきりした山形の模様が認められる。碑面に表れた、この割れ目のような山形は、厚い絹雲母片岩層の断面なのである。この山形は崖状を成し、それに続く左下一帯は剥げ落ちて、一段低い面を形成している。

このように、真弓山寒水石は風化が進むと剥離をおこしやすくなるので、碑文を刻むには適しない。まして碑の山形のような段差には文字を刻むことができない。拓本を見れば、碑文はこの山形の模様を避けて刻まれていることがよく分かる。斉昭は、このような欠点を持つ真弓山産の寒水石を敢えて選び、しかも、その野面を用いたのである。

現状で、この碑の碑面と背面を比較すると、背面は碑面よりも極めて新しい上に、絹雲母片岩の端などは、全く表れていない。これは、碑の後方半分が崩壊して新しい面が表れたためと考えられる。

この碑が建てられた水戸藩駒込邸から浅野家の庭に立つまでの経緯は不明であるが、何度かの移転、移設を重ね、その後の配慮がな

されないうまま現状に至ったと考えられる。何れにしても、考えられる過程は碑にとつて大変厳しいものであったことは間違いない。た

めに、碑は前述の如く後半分が崩壊してしまい、厚さがわずかに九〇センチメートルになってしまった。ただ幸なことに、正面から見たときには充分なボリュームが感じられる、これが救いである。

この碑は、右のような碑石を使用しており、写真で示したような形状のもので、幅約一メートル、高さは約一・五メートルである。

なお、碑石の天場から約三十センチメートル下がった位置を上辺とし、横七十七センチメートル、縦百十八センチメートルの長方形の範囲の野面に、碑文が草体で刻まれ、この碑文の上に、丸文字で「向岡記」の三字が題額として刻まれている。題額、碑文については後述する。

この碑石、碑文を見るにつけ、あらためて斉昭の審美眼の確かさを感じるのである。

真弓山産寒水石は、真弓石・水戸寒水石・大理石などと称することもある。何れも俗称。



三、碑文（三字＋六三八字合計六四一字）

向岡記

空美都大和神樂浪能志賀王當隣波不留紀京師能阿登々天微夜備遠能固々可紫孤半衣有處袁
綿泥弟八許々當久能意茂斯呂幾宇他那賀每出羅連奈杼勢斯迦良名處佐邊存伊止多加梨計流
四甘阿流遠枯々毛登半無河新閉与里他計岐武夫乃三珥志庭彼持資能入道娜杼巨曾安禮

其外半大方美也媚馱累人破少九那無有芝可婆其名聞由類處母以當豆良二去層見過信

氣面登以登口遠新奇袁時能遊介連伐咲花能盛南流御世尔伴登利賀鳴吾妻能国

夢沙新野能荒他留毛伊都始迦名阿鶩禮流等許呂杼許路多久南隣天安屢八

石婦美立那杼四亭其賀故用士閑吉都介努連婆於能豆可樂人能之屢別得毛奈利

嘉通波其處能於門低應許指南羅夢何始曾母曾毛胡禮能處巴古遍

太郎義家能君陸輿弊下里賜比異可面志丘阿羅布流延美芝等遠也波斯無氣賜肥志時能

愈記加俾智奈理登底摩枯藤伊津波隣破志良祢渡其遠利鎧嘉雞羅禮當離登以不浮留寄案母

安那里又小野小町賀宇當尔武藏野能向岡登與迷流母此處仁也安良牟今母此處遠左以敝婆

許半女傳當幾名處爾四堤春夏秋冬能都吉奴詠尔八花子規紅葉雪不流衣打捨辨句母

阿良称伐武藏野能宇氣樂登加云米累花数奈良奴建男等母此處尼住奴連伐登庭今茲

文政十萬梨一登勢止移布年能夜余秘能十日咲滿他留佐九良賀本迹志亭可丘波加伎通孔類二許曾

佐屢波弓矢藤類身毛猛吉乎乃美本利寸流目能加波登思不尔大和宇當八武夫能心乎

也波良具留奈流遠其賀酒別江斯羅称婆娜迦奈可以飛出川閉鬼固登能波毛阿良称杼加々流處遠

只耳見過佐牟門阿陀樂斯氣禮伐夜左斯可禮杼迦九那無

名尔進於不春爾向賀岡難連婆余尔多具肥奈岐華乃迦計哉

四、碑文の読み

向岡記

空美都大和、神楽浪能志賀王當隣波、不留紀京師能阿登々天、微夜備遠能、固々可紫孤、半衣有處袁

綿泥弟八、許々當久能意茂斯呂幾宇他、那賀每出羅連奈杼勢斯迦良、名處佐邊存伊止多加梨計流。

四甘阿流遠、枯々毛登半、無河新閉与里他計岐武夫乃三珥志庭、彼持資能入道娜杼巨曾安禮、

其外半大方美也媚馱累人破少九那無有芝可婆、其名聞由類處母以當豆良二去層見過信

氣面登、以登口遠新奇袁、時能遊介連伐、咲花能盛南流御世尔伴、登利賀鳴吾妻能國

夢沙新野能荒他留毛、伊都始迦名阿鶯禮流等許呂杼許路多久南隣天、安屢八

石婦美立那杼四亭、其賀故用士閑吉都介努連婆、於能豆可樂人能之屢別得毛奈利、

嘉通波其處能於門低應許指南羅夢何始。曾母曾毛胡禮能處巴、古遍

太郎義家能君、陸奥弊下里賜比、異可面志丘阿羅布流延美芝等遠也波斯無氣賜肥志時能

愈記加俣智奈理登底、摩枯藤伊津波隣破志良柵渡、其遠利、鎧嘉雞羅禮當離登以不浮留寄案母

安那里。又小野小町賀宇當尔、武藏野能向岡登與迷流母、此處仁也安良牟。今母此處遠左以敝婆、

許半女傳當幾名處爾四堤、春夏秋冬能都吉奴詠尔八、花子規紅葉雪不流衣打捨辨句母

阿良称伐、武藏野能のう氣樂登加云米累花、教奈良奴建男等母、此處尼住奴連伐登庭、今茲

文政十萬梨一登勢止移布年能夜余秘能十日、咲滿他留佐九良賀本迹志亭可丘波加伎通孔類二許曾。

佐屢波、弓矢藤類身毛、猛吉乎乃美本利寸流目能加波登思尔、大和宇當八武夫能心乎

也波良具留奈流遠、其賀酒別江斯羅称婆、娜迦奈可以飛出川閉鬼固登能波毛阿良称杼、加々流處遠

名耳見過佐牟門阿陀樂斯氣禮伐、夜左斯可禮杼迦九那無。

名尔進於不、春爾向賀岡難連婆、余尔多具肥奈岐、華乃迦計哉。

五. 読み下し文

むかひがをかのき
向岡記

空満つ大和、さぎ浪の志賀わたりは、ふるき京師の跡とて、みやびをの、ここかしこ、映え有る處を
めでては、ここたくのおもしろきうた、詠め出られなせしから、名處さへぞ、いと多かりける。
しかあるを、ここもとは、むかしへより、たけき武夫のみにして、彼の持資の入道などこそあれ、
其の外は大方みやびたる人は、少なくなむ有りしかば、其の名聞ゆる處も、いたづらにこそ見過し
けめと、いと口惜しきを、時のゆければ、咲く花の盛りなる御世には、とりが鳴く東の国、
むさし野の荒れたるも、いつしか、名あがれるところどころ多くなりて、あるは
石碑立てなどして、其が故よしかきつけぬれば、おのづから、人のしるべともなり、
かつは、其の處のおもておこしならむかし。そもそも、これの處は、古へ、
太郎義家の君、陸奥へ下り給ひ、いかめしくあらぶる蝦夷等を、和しむけ給ひし時の、
行き交ひ路なりとて、まこといつはりはしらねど、其のをり鎧かけられたりといふ、ふるき松も
あなり。又小野の小町が歌に、武蔵野の向岡と詠めるも、この處にやあらむ。今も、此の處をさいへば、
こはめでたき名處にして、春夏秋冬のつきぬ詠めには、花、子規、紅葉、雪ふる古衣打ち捨つべくも
あらねば、武蔵野のうけらとか云ふめる花、数ならぬ建男等も、此の處に住みぬればとて、今茲に、
文政十一年といふ年のやよひの十日、咲き満ちたるさくらが本にして、かくはかきつくるにこそ。
さるは、弓矢とる身も、猛きをのみ欲りするものかと思ふに、大和うたは武夫の心を
やはらぐるなるを、其が術え知らねば、なかなかいひ出でつべき言の葉もあらねど、かかる處を
只に見過さむもあたらしければ、羞しかれどかくなむ。
名にし負ふ、春に向かひが岡なれば、世に類ひなき、花の影かな。

六・語釈

そらみつ

さざなみの

「大和」にかかる枕詞。
「志賀」や「大津」にかかる枕詞。

みやびを

はえあるところ

琵琶湖一帯の古名であるという。
風流人。風雅の士。
引き立ってみえるところ。

ここたくの

正しくは「ここだくの」。こんなにも数多くの。

おもしろき

趣きのある。興味深く感じられる。

詠められ

詩歌がつくられ。吟詠され。

ここもと

このあたり。

むかしへ

昔。「へ」は方向。例：ゆくへ（行く方向。ゆくえ。）
沖へ（沖の方。）

猛ぎ武士

強く勇ましい武士。

持資の入道

太田持資（一四三二〜一四八六）のこと。室町

時代の武将である。江戸城を築き（一四五七）

居城とした。軍事に通じる一方、文学を好み、

和歌にも長じていた。入道して、道灌と号す。

時のゆければ

ときが過ぎ去ったので。

咲く花の

「盛り」にかかる枕詞。

盛りなる御代

徳川家の治世をほめたたえる表現であろう。

鶏が鳴く

地名「東」にかかる枕詞。東国の言葉が京の

あるは

例えは。一例として。

石ふみ

石碑。

故よし

理由。いわれ。

太郎義家の君

源義家（一〇三九〜一一〇六）のこと。平安後

敵めしく荒ぶる

期の武将で、八幡太郎と号した。陸奥の阿部貞

蝦夷ら

任を討つなどした。
荒々しく乱暴を働く蝦夷ども。

和しむけ

平和にして。平定し。

行き交ひ路

ゆき来した道。

あなり

あるなり↓あんなり↓あなり と変化したこと

武蔵野の向岡と

ば。あるという。「あると聞いた」の意。

詠めるも

新勅撰和歌集卷十九に「題知らず 小町」とし

て「むさしのの むかひのをかの くさなれば

ねをたづねても あはれとぞ思ふ」とある。

（武蔵野の向岡の草なれば根をたづねてもあは

れとぞ思ふ）

武蔵野の向岡の草であるから根を探し求めるだ

けでも趣が深い。

春は花、夏はほととぎす、秋は紅葉、冬は雪。

花子規紅葉雪

雪ふる衣「うしろも」

「ふる」は掛詞。一語に「降る」と「古ふる」の二つの意味を持たせている。「雪降る」「古衣打ち捨つべくも」と続く「ことは遊び」である。

うけら

「オケラ」の古名。キク科の多年草。

うけらとかいふめる花

うけらとかいうらしい花。ここでは「どこにでもあり、とるに足りない」との意味をこめて「数ならぬ」の序として用いたもの。

文政十まり一とせ

「文政十余りひととせ」。「文政十一年。一八二八年。

弥生の十日

三月十日。

ほりする

「欲ほりする」。欲する。望む。

やはらぐるなるを

和らげると聞いているが。

そが術すべえ知らねば

その方策を知り得ないので。

あたらし

惜しい。もったいない。

やさし

身もやせ細る思いがする。恥はずかしい。

やさしかれども

やさしくあれども↓やさしかれども。

名にし負ふ

その名にふさわしく。「し」は強意の助詞。

花の影

(桜の)花の姿。花の有様。

七. 現代語訳

むかひがおかのき
向 岡記

(空満つ) 大和や (神楽浪の) 志賀のあたりは、古い都の跡ということ、風雅な人々があちらこちらを美しくすばらしい所であるとほめたたえ、沢山の趣向を凝らした歌が詠まれたりしたので、名高いところが大へん多いのである。ところが、この辺りは、昔から勢い盛んな武士ばかりで、かの太田道灌などが居つたとはいへ、その外は、全体として雅な人は少なかったから、名の通つた所もむなしく見過してしまつたのだろうと大層残念なことであるが、時が移りゆき (咲く花の) 盛りの御代になつた今では、(鶏が鳴く) 東の国、武蔵野の荒野も、何時の間にか名の知れた所が多くなつて、例えば石碑を建てるなどしてその主旨などを書きつけたならば自然と人々の手引きともなり、ひいてはその地の誉れともなるだろうよ。そもそもこのあたりは、その昔、源義家が奥州に下られ、荒々しく乱暴な蝦夷どもを平定された時、往き帰りされた路である、ということ、真偽のほどは知らないが、その折り鎧をお掛けになつた古い松がある、と聞いている。また、小野の小町の歌に「武蔵野の向岡」と詠んだのも、このあたりではなからうか。今もここを「向かいが岡」ということからしても、ここは申し分ないなくすばらしい名所であつて、春夏秋冬の情趣の尽きぬ眺めとしては、花、ほと、ぎす、紅葉、雪と、(ふる衣) 捨て置き難いものがあるし、武蔵野の「うけら」とかよばれる花のように、取るに足りない勇者らも、このあたりに住んでいることだからと思ひ、今ここに、文政十一年の三月十日、咲き満ちた桜の木のもとに、このように書きつける次第である。というのは、武士の身であつても、勇猛だけを望むものではあるまい、と思つと同時に、和歌は武人の心を和らげると聞いているが、その和歌をつくる方策を知り得ないので、容易には、言い出すことも見つかからないけれども、このような所を、何もせずに見過してしまうのも惜しいので、恥ずかしいけれども、このように詠んだ。

名にし負ふ 春に向岡なれば 世に類なき 花の影かな

(まさにその名にふさわしく 春に向かう、その向かいが岡であるからして、他に比べるものがないほどすばらしい花の有様であることよ。)

二、書体等

東京都公文書館にこの碑の拓本が保存されているが、調査研究の多くはその写真に頼った。この拓本には不鮮明な部分が多いので、これを正しく読みとり、また臨書を完成するまでに長期間を要した。しかし、その間に知りえたことは少なくない。

碑文は万葉仮名を用いた漢字かな混じり文である。筆を自在に駆使した華麗な書体に筆者は強く引かれた。見慣れない形の字も少なくないが、書道字典等^{〔参九・参十・参十一〕}に当たって丁寧調べてみるとその形が見つかり、納得するということが多かった。臨書を通じて斉昭の学識の広さ深さ、並びに研究心、創造性の豊かさを再認識した次第である。

三、碑文の文字と読み

「贈従二位重衡 源斉昭卿詠

向岡記

東京本郷弥生町

侯爵浅野家庭内碑^{〔参七〕}

と表紙に書かれた和本があり、碑文の臨書と読みを載せている。貴重な文献である。

ところでこの碑文における斉昭の筆遣いは、大胆かつ奔放であり、常識的な書き順、筆運びから大きく外れている字が多い。その上拓本は相当見にくく、不鮮明な文字が散見される。

このような事情によるのであろうが、この和本「向岡記」の字体

は、率直に言って不正確であり、完全な誤りも二、三に止まらないので注意する必要がある。

なお、和本「向岡記」にはふり仮名がつけられており、細かいことを言わなければ、ほぼ正しく読み取っていると分かる。筆者はこのふり仮名を基礎に据えて句読点を整え、仮名遣いを正し、正確な読みを目指したが、どうしても納得できない表現が二か所あることに気づいた。講究の結果、その一方は碑文の読み違い、他方は読み落としてあることが判明した。

一行目の最後の字を、和本「向岡記」では「都」の草体と見たらしく「ト」と仮名を振っている。正しくは「袁^マ」であった。

十二行目に「春夏秋冬能都吉奴詠^{ハルナツキフユノツキヌナガメニ}尔^ニ（八）花子規^{ハナコトノギス}・・」と刻まれているが、「八」が読み落とされている。この「八」は片仮名の「ハ」のように刻まれているが、白い斑点が二つのようにみえるのである。文脈上ここには「は」に相当する文字があるはず、と確信を持って見れば、斑点ではなく文字であるとわかる。

四、題額

「向岡記」と書かれた丸い文字は、すこぶる珍しい書体であり、「梵字筆のような筆で書いた、いわゆる飛白体である。」とか、「空海七祖像讚以来の珍しい字体。」などの評がある。たしかにその通りであると思う。

しかし、空海の書や中国で行われている飛白体などと比較した時、この題額は際立った特徴を持っている。いわゆる飛白体を見ると、

梵字筆などの用筆の回転は、腕のねじれに頼っているとおもわれる。腕のねじれには限度があるから、筆を同じ向きに回転し続けている例は見られない。今、例えば「向」の字を見ると、右半分を書く時、筆を時計回りに二回転も廻し続けながら書いていると分かる。このように不思議な書き方をした例が他にあるだろうか。

もう一つ違いを挙げれば、飛白体の用筆は刷毛のような穂先を持って見えている。しかしこの丸文字は、十一本の細筆を一列に並べた連筆を用いて書いたものと考えられる。筆者はそのような連筆を試作し、この丸文字の臨書に成功した。

なお、書きながら筆を同じ向きに回転し続けるためには、筆の軸を細くすることが必要であった。試行錯誤の結果、軸の直径を三ミリメートル以下の太さにすれば、字を書きながら、指の腹で筆を同じ向きに二回転させることが可能であることが分かった。斉昭は多分このような筆を作らせたのだろうと思う。

また、この三つの丸文字を子細に観察してみたところ、その輪画は何れも真円に近いことが分かった。

例えば「向」の字を見ると、はじめに筆を反時計まわりにほぼ半回転させ、続いて時計回りに二回転させながら書いている。しかも輪郭が真円に近い。

あとで詳しく述べるが、斉昭は碑文を直接碑石に書きつけたという説がある。いかに筆の立つ器用な人物であったとはいえ、野面の碑石に直接この丸文字を書くといった芸当がたやすくできたらうとは思えない。

筆者はコンパスで円を書いてフェルトペンでなぞり、これを下敷きにして繰り返し練習し、反故の山を作ってやっと書くことができた。それでも拓本の字形には遠く及ばないと感じている。この事実は、次項「書丹説」と密接なかわりを持つ。



連筆

五、書丹説

多くの石碑は、碑文を刻む場所を平面に仕上げ、ここに碑文を刻む。しかし、この碑は野面のままの、ほぼ平らな面を利用したものである。しかも、左下の部分は、剥れ落ちたように一段低い面になっている。その面積は全面の二十パーセントに達し、二つの面の境界は崖状の段差を形成している。当然ながら、この境界上に字を刻むことはできない。碑文はこの境界を巧みに避けて刻まれている。

ところで、この碑文は斉昭が書丹したもの、つまり、この碑面に朱墨などを用いて書いたという説があるらしい。野面の凹凸のある碑石面に、この微妙な字をじかに書くことは極めて難しいことで

あつたらう。それにしても、書丹であるという根拠はどこにあるのか知りたい。

この碑文は段差やきずを物ともせず、思うがまま、大胆に書き進められたように見える。しかし、題額並びに十八行に書かれた碑文を書の作品として見れば、その書きぶりには、驚くばかりの気配りが感じられる。六百三十八字が、行間を等しくして整然と配置され、文章の最後の行は、余白を少し残して見事に収まっている。碑文の構成は極めて計画的であり、計算しつくされたものといえるだろう。さて、書丹説を考える時最大の疑問は、斉昭が碑石をどう置いて、どんな姿勢で書いたかという点にある。

碑石を立てて書いたのであろうか。碑文が横書きならとも角、縦書きだという事を銘記しよう。小さな字が多くしかも繊細な連綿体だから、顔や体を碑面から遠く離れたまま書くことは難しい。一番下の字を考えると、碑石を一メートルぐらいの高さの台に載せる必要がある。してみると、上端の字の高さは二メートルをはるかに越え、手が届くまい。リフトのような装置で身体を、十八回上下させたのか。まさか石を上げ下げしたはずもあるまい。

では、碑石の面を水平に置き、膝が痛そうだから座布団でも敷いて書いたのか。この場合は、座布団を十八回往復させながら長時間書き続けたことになる。

筆者は一回の臨書に約十時間を要した。無論、斉昭はずっと短時間で書きあげたらう、とは思うがやはり相当の時間を要したに違いない。

斉昭という人は、前例のない字形を創作して題額とし、これを書くために全く独自に工夫した筆を創り出した。この一事から推しても、極めて独創的かつ合理性に富んだ人物であつたと思われる。しかも、この碑によって、「これが斉昭の書だ。」というメッセージを後世に伝えようと考えたに違いない。

そのような碑文を、右に述べたような不自由な方法で書こうとしたらうか。もつとまい方法を考えたのではなからうか。

もし、筆者が斉昭の立場にあつたとすればどうしただろう。第一番に石材の状態をよく観察したに違いない。次に碑石の大きさの紙を用意させ、段差やきずを紙に写し取らせる。この紙を机上に置き、あとは段差やきずを避けながら普通の書作品を作る手順で書き進める。これを下書きにして新たに用意させた紙を重ね、納得のゆくまで修正を加えることも可能である。

題額は円形の下敷きを利用すればよい。あとは、この作品を石工に渡し刻ませるだけである。

筆者はこの碑文を机上で紙に書いたのだろう、と考えている。

なお臨書の「秋峰」は飯村博の雅号

むすび

苛酷な運命を生き延びた「向岡記」碑を、さらに追い詰めたのは酸性雨であつた。

工場を動かし、自動車を走らせる等、人間の経済活動に伴って燃やされる化石燃料は、二酸化硫黄（亜硫酸ガス）や窒素酸化物など

を含む排ガスを多量に放出する。二酸化硫黄は、大気中で酸化されて硫酸となり、窒素酸化物は硝酸に変化する。

さて、気象の変動によって大気中に生じた小さな水滴は、落下しながら徐々に成長するが、この間に前記の酸性物質を溶かし込む。こうして作られた雨滴が酸性雨になるのである。

近年大都會では、夏に樹木の葉が枯れ、落葉する現象が見られる。酸性雨の仕業であり、この影響が強まると枯死することさえある。このことに限らず、酸性雨の被害は多岐にわたる。

ところで、この碑石、寒水石は粗粒の石灰岩であるため、風化作用を受けやすい。「弘道館記」碑が屋内に建てられているところをみると、斉昭は、風化しやすいことを承知しながら築山の上にこの碑を建立したのかもしれない。

とはいえ、酸性雨による風化は、さすがの斉昭にも想定外だったろう。石灰岩は、鍾乳洞の例からもよく知られているように、酸性の水にはとても弱い。

しかし、捨てる神ばかりではなかった。平成二十年八月八日この貴重な名碑「向岡記」は、多くのご専門の方々のご援助、ご協力によって、浅野南門内にやっと安住の地を得たのである。

この碑が世に広く知られ、また、ご覧いただけることを切に願う。

参考文献

- 一、「史蹟名勝天然記念物保存協会第壹回報告書」複製版
2003/6/25

「第十五 東京市本郷區彌生町侯爵浅野長勲邸内向岡碑」不二出版

二、「水戸藩史料」別記 上 1970/12/20 吉川弘文館

三、「向岡記」財団法人水府明德会蔵 碑文斉昭自撰自書 絵狩野

興禎画 文政十一年頃

四、「向岡記」拓本 東京府記録係小宮山綏介 東京都公文書館蔵

明治十年頃

五、「書苑」關東訪碑紀(十三) 浅野侯邸の向岡の碑と徳川侯邸の吾妻廼苞の碑

六、「常陽藝文」藝文風土記 寒水石を産する山 2005/5

七、和本「向岡記」浅野家が碑を東京大学に寄付したとき、碑につけられた本とされる 昭和十七年頃

八、「石の俗稱辞典」遠藤祐二・加藤碩一共著 愛智出版 1999/3

九、「書道字典」伏見冲敬編 1984/8 角川書店

十、「必携五体字鑑」松田舒編 1990/7 柏美術出版

十一、「草書の事典」圓道祐之編 1994/1 講談社

十二、「日本地名大辞典 8茨城県」1983/8 角川書店

十三、「常陸太田市史」民俗編 常陸太田市史編纂委員会 1979/3

常陸太田市

十四、東京大学史紀要 第二八号(2010/3) 水戸藩駒込邸の研究

藩邸内外の景観と造園の検討 原祐一

(しおばら みやこ 日本石造文化学会)

(いづむら ひろし 金蘭書道会)